

会長ごあいさつ

熊本支部のみなさまへ

津田塾大学同窓会 会長 飯野正子



新型コロナウイルス感染拡大の不安が長く続く中で、豪雨による水害に遭われたかたもいらっしゃると思います。お見舞い申し上げます。一刻も早く、安心して過ごせる日々が戻りますよう、お祈りいたします。

この文集のテーマは、「コロナ禍を経験して考えたこと」。近況でも昔の思い出でも、とのことですので、この機に、最近と昔の両方を振り返ってみました。

同窓会会長としてコロナとの「戦い」が始まったのは3月。すでに企画されていた行事などをどう変更するか、ズーム会議やメール審議で役員のみなさんとともに頭をひねりました。そのころは、コロナの影響がこれほど広範囲に、そして長期にわたるとは思ってもいませんでしたが。ことに苦しく悲しい思いをしたのは、支部のみなさんとお会いできる貴重な機会である総会などを中止と判断せざるを得なかったとき。ほんとうに残念でした。そんな中で、ある人が私に思い出させてくれました。東日本大震災のとき学長だったんですよねと。そうでした。コロナと結び付けて考えてみませんでした。忘れもしない2011年3月11日。その後、停電で暖房がなく寒い寒い大学のキャンパスの宿舎に寝泊まりし、震災の後の対策に必死でした。卒業式は中止（今年と同様ですね）。大学の近所のスーパーマーケットに食料品を買いに行ったら、停電のために解凍してしまった冷凍食品以外には何もなかったこと、職員のかたがペットボトルの水を届けてくださり、救われたこと、アメリカ在住の卒業生が小包を送ってくださり（「家にありっただけのパンを大急ぎで送ります」とのメッセージがついていました）、感激して、キャンパスにいる人たちに配ったこと、などを思い出します。みんな協力することの心強さを味わい、深く感謝した次第です。

もう一つ、個人的な思い出を。震災があった3月11日は金曜日。毎週金曜

日には定例の財務会議があり、学長として必ず出席していました。ところが、その前日の木曜日、秘書の三宅さんが、こう伝えてくださったのです。「明日の財務会議は急ぐ議案がないので、開かないことにしました。明日ぐらいはお家にいてあげたらいかがでしょう。いつもご家族を犠牲にしておられるのですから。」その「明日」というのは「娘の結婚式の前日」という意味でした。娘の結婚式が3月12日（土）に予定されていたのです。そして、その「明日」に東日本大震災が起きたのです。地震のあとは夜まで停電で、電話も通じず、結婚式は中止だと思っていましたが、式場は免震装置があって無事。お料理の準備もできているとのことで、予定通り結婚式は行われました。アメリカから出席してくださるはずだった友人の飛行機が成田に着陸できないなど、いくつかのハプニングはありましたが。もし、もう1日遅ければ、緊急事態の状況で華美なことは中止すべきだと判断したのかもしれませんが、その日は、まだ被害状況もわからないまま、予定通りに実施されたわけです。それにしても、もし前日の金曜日に財務会議があって私が大学にいたとしたら、徒歩で鎌倉の自宅に帰ることはできず、私は結婚式には出席できなかったことでしょう。今も、あ那时的三宅さんの配慮に感動・・・。

今、起きている新型コロナウイルス感染拡大も、東日本大震災と同様、津田塾大学や同窓会に大きな影響を及ぼしました。もちろん同窓会の活動そのものは今も大きく制限されています。大学でコロナ禍を避けるためにオンライン授業が通常になったと同じく、同窓会の会議や活動も新たな方法を探りつつ行っています。震災で被災した学生やその家族を支援した運動と同じように、コロナ禍のために収入の減った学生や家族を支援する動きも活発です。危機に際して同窓会・同窓生が立ち上がった例は、これらが初めてではなく、1923年の関東大震災で女子英学塾が灰燼に帰したとき、同窓生の力によって寄付が集められ、新たな校舎ができたという歴史も、その一例です。

財政的な支援以上に重要だと思うのは、同窓生が自分を育ててくれた津田塾大学の現在に関心を持って、大学の発展を願う気持ちだと、私は思っています。歴史を知っている――あるいはその歴史を身をもって経験してきた――同窓生だからこそ、大学がこうあってほしい、将来こうなってほしい、という願いをしっかりと表明できるのですから。同窓会と大学との絆は、その熱い思いが基盤なのだと思います。コロナ禍の大きな不安の中で、急速に新たな対応を求められている今、その絆は、いっそう強まり、新たな発展につながると信じています。